

平成22年度 ほくぎん若手研究者助成金 研究実績報告書

氏名	所属・職名		助成金額
川崎聡大	人間発達科学部・教授		300,000 円
研究課題名	言語発達の気になる聴覚障害児に対する神経心理学的アプローチに関する実証的研究 ーアセスメントと個別教育プログラムの効果を中心にー		
研究の概要	<p>[研究開始当初の背景, 研究の目的, 研究の方法等について記入]</p> <p>「聴能訓練を行っても思ったほど言語やコミュニケーションがのびない」「聴覚障害児の30パーセントに学習障害の合併を認める」。についてその背景に意味処理能力や構文処理能力の違いが存在するのではないかと仮説を立て神経心理学的評価法を用いて富山県内の29児(6歳2ヶ月～12歳8ヶ月)を対象として検討した(明らかなMRは除外検討)。検討内容は、従属変数であるコミュニケーション能力に質問-応答関係検査の総得点を採用し、主要独立変数として意味処理能力、構文処理能力を採用し改定絵画語彙検査と失語症構文検査を採用してコミュニケーション能力の低下の要因を検討した。</p>		
研究の成果	<p>[研究成果について具体的に記入]</p> <p>今回学齢期の児童を対象としているが、構文処理では本来生活年齢6歳で突破される課題である「かき混ぜ文」(統語方略助詞・補文構造I)を突破した児は29名中6名に過ぎなかった。これは難聴児では一般的に「やりもらい文」(授受構文)の理解が困難とされるが、その前段階での躓きが明らかとなった。かき混ぜ文の理解達成非達成の二群間において質問応答関係総得点に有意差を認めた。また改定絵画語彙検査結果の相当年齢は失語症構文検査の到達相当年齢を上回っており、逆の結果を示すものがなかったことから構文処理能力を伸ばすには必ず意味処理、「理解語彙の発達」が必要不可欠であることが明らかとなった。この結果をもとにPVT-Rの結果が一定以上の1事例に対して統語指導を実践したところ、コミュニケーション能力の向上を認めた。</p>		
研究成果発表状況	<p>[雑誌論文, 学会発表, 図書, 新聞掲載, 研究に関連して作成したWebページ, 産業財産権(特許権等)の出願・取得状況について記入]</p> <p>本年度、本学とやま発達福祉学年報に原著論文として投稿予定である。</p>		
経費の執行状況	区分	執行額(円)	備考
	教材費	103,917	電子辞書(ことば調べ用)サービス
	指導記録用映像	96,808	VTR、メディア、映像保存用HD
	検査キット記録用紙	85,415	SALA、RCPM、トークン、ストループ
	指導用絵カード	13,860	S-S 語彙語連鎖絵カード
計	300,000		